

「かわいい子には、海外体験させよ」これが親の偽らざる感想です。

この夏、親の都合で一ヶ月ほど英国に滞在する機会を得、15歳と12歳の息子をSt. Bede'sに三週間送りました。高校1年と中学1年になった二人は当初、「部活、夏合宿、同窓会の花火大会さえもいけない」と不平不満のオンパレード。確かに気の毒だと思いつつも、二人を日本に残すことも出来ず、「きつと楽しいよ」「世界中の同年齢の友だちができるよ」と親が言っても、最後まで彼らの「行かされる」感が否めませんでした。そのようなスタートでしたから「楽しいはず」という親の一方的な押し売りはやめ、「強制収容所に行かされると思うなら、それで結構。サバイバル合宿だ」とヒースロー空港に着いた直後に別れました。三週間後に出会った息子たちは「色々あった」と言いながらも少しだけたくましくなっていました。二人が学んだものは「危機管理」と「生活・健康管理」、そして「英語を通して日本人であることを自覚した」ことでしょう。学校到着後、二人は別々の部屋に寝かされ、翌日も朝食後、すぐにプレイスメントテストがあったようです。長男Dは食後の予定を知らぬまま、ひとまず部屋に戻り連絡があるまで部屋を整理して待機していたようですが、次男Tは、兄が教室に居ないことに気づき、「Where is D? He is not here.」と英語で担当者に尋ね、兄がいないことに危機感をつのらせました。スタッフがDを呼びに行き一件落着きましたが、まさに初日から「受身に対応を“待つ”か」、「能動的に自ら解決するために“質問するか”」というアクションを迫られ、どれが賢明な判断か、身をもって知ったようです。折り紙を得意とするTは日本文化の紹介の一環として事前にSt. Bede'sからの促しもあり、300枚の折り紙を用意して意気揚々と出かけました。あいにくイベント担当者とディレクターの意思疎通がうまくいかず、Tが折り紙を紹介することは一度もかきませんでした。一ヵ月後、学校から「この件は残念ではあったが、Tは自らスタッフに折り紙を紹介したい、と積極的に声をあげることができたはず」という返事を頂戴しました。このメールを頂いた当初は少々驚きましたが、冷静に考えますと、この一件も「危機管理能力」をつけることの延長線上にあり、Tは自ら望むのであれば、積極的に相手に伝えないと「希

望は実現できない」ことを知ったわけです。良い学習体験でありました。「生活・健康管理」面でも、息子たちは初めて洗濯物を色分けし、週2回の指定日に出さないと着る服がないという経験をしました。自分でたんで、しまう、ということも。お蔭様で、Dは抜き打ちチェックで部屋が一番整理整頓されているという、親にとってはオドロキの「Best Room Award」を頂きました。喘息持ちのTも喘息手帳に毎日記帳し、健康管理も一人で行えるようになりました。また折り紙では力を発揮できなかったものの、卓球大会で優勝。これは日本で合宿に参加できなかった本人にとってはウレシイ誤算でした。自信がつくと好きになり、好きになると上達したいと練習に励む、という相乗効果が生まれ、この夏以来、卓球熱に火が付きました。折り紙は後日、British Origami Societyのメンバーと折る機会があり、「紙ニュケーション」ができませんでした。ここでは英語は「コミュニケーション・ツール」にすぎず、言葉、年齢、国籍を超えて夢中に共有できる“何か”があるといかに楽しいか、折り紙文化を再評価し、英国でも日本を愛する大人の輪に加えて頂いたことで、12歳の子どもは少し大人になりました。この文章を私が書くにあたり、息子たちの感想文を読んでみましたが、「どうでもいいことをしゃべった」とTは書いておりました。「どうでもいいこと」が何であるかはともかく、世界の同年齢の子どもたちと“話せた”という経験はなかなか日本では出来ることではありません。日本の漫画やJポップのことを質問され、日本のポピュラーカルチャーに対する関心が高いことも知ったようです。ロシアの子たちは絶えずヒマワリの種を食べている、とか、アラブの子はアブドゥラという名前がすごく多かった、とたわいもないことを今でも夕食で話題にします。今後も新聞でアブドゥラという名前ができれば、彼らはすぐ「あの夏のSt. Bede'sで出会った友だち」を思い起こすでしょうし、台湾のニュースがTVにでれば、台湾人の友だちに思いをはせることでしょ。このようなささやかなことが、グローバルなことに関心を寄せる初めの一歩だった、と思います。末筆になりますが、出発前にご相談ののって頂いたMichiには改めてこの場をお借りし、心よりお礼申し上げます。2009年10月12日(月)



僕はこの夏、St. Bede'sで三週間過ごし、多くのことを体験できました。

日本では同年代の外国人と触れ合うことが多くないので、寄宿舎生活では色々な驚きがありました。まず、本当に沢山のアクティビティがありました。毎週火曜日にある卵を投げて洋服などを汚くするゲームは正直好きではありませんでしたが、水をかけまくるゲームはまだよかったです。スポーツ大会もありました。僕はその大会で卓球に参加して、優勝することができました。

毎週水曜日は映画を見たり、また中国団のサーカスも見に行くことができました。別の週には近所の海岸の近くで、カジノみたいなゲーム・センターで遊んだりしました。食事は口に合わない



この夏、僕は弟と一緒に、St. Bede'sというイギリスのサマーキャンププログラムに参加しました。そこでは日本では体験できないような事を沢山しました。

まず、世界各国の人達と会うことができたことです。普段はあまり見かけない国の人たち、たとえばトルコやウクライナ、サウジアラビアからの人たちと友達になり、お互いの国の文化の違いなどについて話し合いました。最初は簡単な事、趣味の話やお互いの国のいいところの事などについて話をしていたのですが、親しくなるにつれ、宗教やお互いの学校の制度の違い、自分の国の有名人や習慣がどれだけ他国に知られているか、というような話もしました。外国人から直接その人たちの国についての話を聞くということは、本やインターネットでは容易には得られない、とても貴重な体験でした。

次に、日本ではあまり体験できないような授業を受けることができました。言葉のキャッチボールと言いつつ果物を投げ合ったり、戦争反対を訴えるために戦争肯定グルー



ものも沢山ありましたが、水曜日や日曜日に出るピザやハンバーガーはおいしかったです。お菓子や飲み物は購買部で買ったりしましたが、日本では売ってない、ものすごく甘いお菓子が沢山ありました。

勉強の面では英語のレベルが3のクラスに入り、結構難しかったですが、ロシアや台湾の友達ができ、英語でどうでもいいことをしゃべったりしました。遠足では、ロンドンのプリティッシュ・ミュージアムやディケンズ・ワールドを訪れました。プリティッシュ・ミュージアムではエジプト・ルームでミイラなどを見たことが印象に残っています。ディケンズ・ワールドでは昔の歴史などもわかるように工夫されて再現されていました。色々なことがありましたが、いい経験になりました。 2009年9月25日

プに対してポスターを作ったりしたことなどは、これまでありませんでした。



しかしその様な授業が多かったためか、勉強して疲れた、萎えたなどの不満は感じませんでした。

そして最後に、色々な場所、例えば戦争博物館やショッピングモール、そして「カジノ」という近所の海岸にある昔ながらの娯楽施設に行くことができました。ロンドンではディケンズ・ワールドにも行きました。これらの施設は普段はなかなか行けない所だったので、本当に楽しかったです。

今回のSt. Bede'sのサマーキャンププログラム、行く前はあまり気乗りがしていませんでしたが、終わってみると「また行ってみたい」と思えるような三週間を過ごせたと思います。

海外に出て、そこで普段できないような体験をすることは、外国人と話せるようになる一番の近道となるとても意味のあるものだと今回僕は思いました。 2009年9月25日

私はイギリスへ行ってよかったです。なぜかという日本にいたらできなかった言葉が通じないつらさや、悔しさ寂しさなども経験できたからです。

私は今でも日本を発つ時から日本に帰ってくるまでのことを全部覚えてます。

最初、成田空港に着いた時にはあまりドキドキはしなかったです。でも、もうここでお母さんやお父さんとお別れというときは泣きそうでしたが、心の中では「もうイギリスに行くんだ」というドキドキ感がありました。でも、飛行機に乗る時はドキドキ感からワクワク感にかわってイギリスに行くのが楽しみでしかたがなかったです。

イギリスに付いてからSt. Bede'sに行く車の中で萌々子と大介という日本人がいるということ聞きながら行きました。

St. Bede'sに付いたら、すぐ萌々子と大介がきて、いろいろ話しかけてくれたのでちよとだけ緊張していたのもほぐれました。

そのあとの一週間はすごく楽しくて、お母さんやお父さんに電話をかけたりしながら、もう帰りたいと思いがらいたその週の木曜日に智気という男の子がきて萌々子、私、大介、智気と



しながら過ごしていました。そしてその週の日曜には大介が日本に帰ってしまいました。私はまだ大介の帰る前に大介に「大介はいいな日本に帰れて」と言ったら、大介が「僕はまだ帰りたくない」と言っていたので私は「なんで日本に帰りたくないんだらう」とその時は思いましたが、最後は楽しくて楽しくて私もまだ帰りたくないと思いました。私が楽しんできたのは、まだきてから一週間目くらいの日曜日にみんなの前でピアノをひいたときから楽しくなってきた、そのあととととと友達もできていって最後帰る日が近づくと、萌々子とトイレと一緒にかくれようかと話していたぐらいすごく楽しかったです。言葉が通じなくても楽しくて、いろいろなことが学べたイギリスへの一人旅でした。



My dear Michi
I thought you might like to see some photos taken last Friday on Red Nose Day - All over the UK people did "funny things for money" to raise money for charity - it happens every year and this year many students also got involved. Ryoko volunteers in the charity shop called OXFAM and so she expecially knew about it and helped to make the day at ICS such a success.
In case this photo is too big I will send the others on a seperate message Enjoy!
with very best wishes
Helen (ICS代表)



OXFAMチャリティー・ショーの木原涼子